〈資料〉

工業系実業専門学校教育専門誌『高工教育』目次集（稿）と解説

内田　徹 [1)]　　丸山　剛史 [2)]

要約

本資料は、工業系実業専門学校教育専門誌『高工教育』の目次集とその解説である。高級技術者養成を主な目的とする工業系実業専門学校は大正期に大幅に拡張され、計20校が設けられた。この拡張が契機となり、工業系実業専門学校間の相互協力と高等教育段階の工業教育刷新のために、『高工教育』が発刊された。これまでその存在がほとんど知られていなかったけれども、７年以上にわたり継続的に発行され、工業系実業専門学校の実状を窺い知ることができる雑誌であることが明らかになった。

キーワード　工業系実業専門学校、教育雑誌、高工教育

目次

１．緒言
２．工業系実業専門学校増設と『高工教育』誌創刊
３．編集体制と記事内容
資料　『高工教育』目次集（稿）

１．緒言

本資料は、1927（昭和２）年１月１日に創刊された工業系実業専門学校教育に関する専門雑誌『高工教育』の目次集（稿）である。旧学制下の工業系実業専門学校の多くが「高等工業学校」を名乗っていた。誌名の「高工」もこれに因んでいると思われる。

これまで『高工教育』誌は、『東京工業大学九十年史』（財界評論社、1975年）において「高等工業教育の刷新を趣旨」（400ページ）として創刊されたことが記されていたが、掲載記事の内容や発行期間は定かでなかった。所蔵が明らかにされていたものは東北大学附属図書館所蔵分（旧仙台高等工業学校旧蔵資料）の第１巻第１号から第11号および第２巻第１号から第12号（第８号は欠号）であった。近年筆者らが第３巻第１、２、４、７号、第７巻第２号を古書にて入手し、同誌が1929年（第２巻）以降も継続的に刊行され、1933年（第７巻）までは刊行されていたことを確認した。終刊の時期は定かでない。現存する号より欠号の方が多いが、雑誌自体の存在もあまり知られていないので、目次集を作成し紹介しておくこととした。

１）浦和大学　こども学部　　２）宇都宮大学　共同教育学部

２．工業系実業専門学校増設と『高工教育』誌創刊

工業系実業専門学校は、旧学制下の実業専門学校の一種である。1881年の東京職工学校（後の東京工業学校）設置を嚆矢とし、1896年に大阪工業学校が設置され、それらは1901年に東京高等工業学校、大阪高等工業学校と改称した。1903年の専門学校令制定、実業学校令改正に伴い、「実業学校ニシテ高等ノ教育ヲ為スモノヲ実業専門学校トス」と規定され、実業専門学校は制度的根拠を得た。

その後、明治後期から大正初期にかけて京都工芸、熊本、仙台、米沢、秋田鉱山、桐生高等染織の各学校が設置された。大正期の高等専門教育機関拡大期に横浜、広島、金沢、東京工芸、神戸、浜松、徳島、長岡、福井、山梨の各学校が設置された。以上はすべて官立であり、明治専門学校（1909年設置）、小西写真専門学校（1924年設置）のみ私立であった。雑誌は大正期の拡張後まもなく発行され始めた。

1927年の創刊号「創刊の辞」によれば、『高工教育』誌創刊の経緯が次のように記されている。

「三人寄れば文珠の智とか一矢可折十矢不可折とか言ひふらされた諺を引用するまでもなく、多数が寄って研鑽討究協力の要は何人も認めて居る。高等工業学校も文部省直轄のみで今二十を算する。これが相互に協力すれば偉大なる何物かを生み出すに違ひない。従来春の校長会議秋の校長打合会廉学校参観会で互の長を取る助けとしたのであるが、これは単に校長のみに限らず広く全職員にも及ぼしたい。遺憾ながら経費が許さぬから、之に代ふるに紙上打合会を案出したのが此機関誌である。紙上打合会の特長は春とか秋とか待たずとも、四時毎月開き得ることである。従て発表を数ヶ月延ばす代りに即時意見を発表して帝国の文運をそれだけ早く促進し得ることである。次には印刷にして記録に残すから、何時でも参考し得る便がある。今一つは少数の校長に限らず一般職員残らず他校の長を知りて己の短を補ひ得ることである、小学にも中学にも乃至補習教育にもそれぞれ機関があるのに、独り高等工業教育に機関の要が無い理由は無い。校数の少い間はとにかく今日教職員六百五十名の盛況を以てして当然生るべきものが生れたのである。筆者の寡聞は未だ欧米に高等教育に関する多数の校を網羅する此種機関のあるを知らぬ。欧米にないものを我帝国に創始する所以は帝国の文運を促進して彼等を凌駕したいためである。模倣時代は去った。創造時代来る。渺たる一小雑誌であるが期する所は頗る大なるものがある。偏に読者各位の援助協力により此所期を実現したい。一言創刊の辞とす。」

上記「創刊の辞」に記されているように、工業系実業専門学校の「校長会議」等の域を抜け出し、工業系実業専門学校教職員同士が「相互に協力」することにより「偉大なる何物かを生み出す」ことを企図して同誌が発刊された（他校種の同様の「機関」への言及があるが、この点の詳細は今のところ不明である）。

３．編集体制と記事内容

第１巻の編集は神戸高等工業学校が担当し、第２巻は横浜高等工業学校が担当した。第２巻１号の「編集室より」には、「編集当番となって本号から横浜高工の手に移りました。」(p.20）と明記されていた。第3巻の編集は広島高等工業学校が担当した（同校は第７巻も担当)。このように『高工教育』誌の編集は「各学校の輪番制」であった。

第１巻は、第２号を「広島高工号」として教育課程や工場実習や現業実習等の実態を紹介した。第１巻第５号は「横浜高工号」として鈴木達治校長の教育方針や授業の内容、施設・設備等を紹介した。こうした各高等工業学校の教育実践や教育条件等の記事は、「長岡高工号」(第２巻第６号)、「山梨高工号」(第２巻第10号)、「明専号」(明治専門学校、第３巻第７号)、「浜松高工特集号」(第７巻第２号）のように定期的に企画された。号によっては私立工業系各種学校の東京高等工商学校（現：芝浦工業大学）見学記も掲載され、まさに「他校の長を知りて己の短を補ひ得る」誌面づくりが目指されていたと考えられる。

同誌には、各学校の入学試験実施状況、使用教科書、就職状況等、当時の工業系実業専門学校の実状を窺い知ることができる記事が多数掲載されている。これらのことは、工業系実業専門学校教育を論じた天野郁夫『近代日本高等教育研究』(玉川大学出版部、1989年)、三好信浩『日本工業教育発達史の研究』(風間書房、2005年）等においても言及されておらず、同誌掲載記事は貴重な情報であると思われる。

筆者らが特に注目したのは、東京および大阪の二つの高等工業学校がそれぞれ東京工業大学、大阪工業大学（現、大阪大学工学部）へと「昇格」する際の経緯に言及した記事が掲載されていたことである。これらの記事により、これまで十分にできなかった、東京高等工業学校等の大学「昇格」における工業教員養成所廃止の経緯を解明できるのではないか、と期待している。

なお、「高工教育」の題字は、創刊当時の文部大臣・岡田良平によるものであることを付言しておく。写真は、第２巻第１号表紙の題字を撮影したものである。

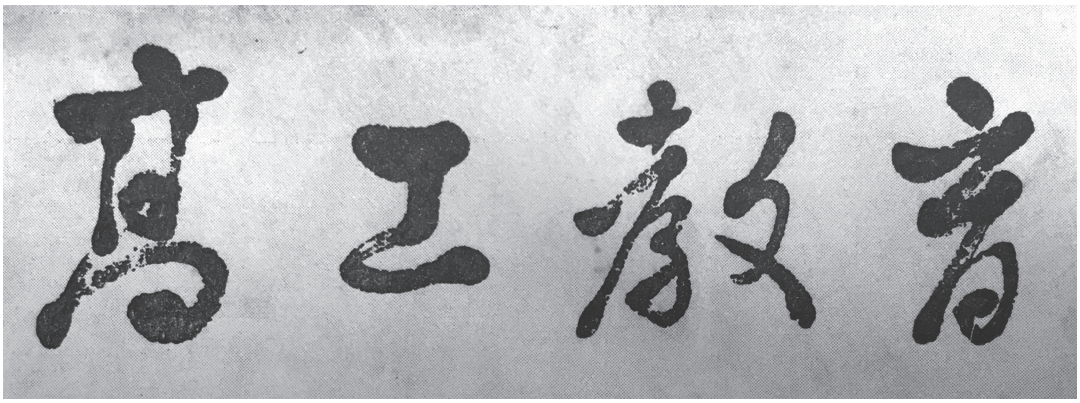

写真　岡田良平による題字

資料　『高工教育』目次集（稿）

凡例

・本目次集を作成するにあたっては、編者が所蔵機関に出向き原資料を確認した。
・第２巻までは目次が掲載されていないため、記事のタイトルを前から順に拾い上げ内容目次とした。第３巻以降は目次が掲載されているので、掲載された目次を転記した。
・所蔵機関名を巻号・発行年月右横の括弧内に記入した。
・執筆者名右横の括弧内の数字はページ数を表す。

第１巻第１号：1927年１月１日発行（東北大学附属図書館）

創刊号

創刊の辞　（1）
運動競技採点法に就て　大阪高等工業学校々友会（2）
授業時間に就て　福田為造（4）
独逸のGymnasium　辻村鑑（6）
我国こうぎょうの実況と実地体験の必要　今岡純一郎（7）
アツプレチスの実習課程　石原勵（8）
教材を使用せる経験の例　後藤文雄（9）
研究　金沢高工近年の研究事項　（9）
講演会　名古屋高工（9）
雑報　(10)
自然科学研究費補助（大正十五年度）　(10)
御大喪に付謹んで哀悼の意を表し奉る　(12)
秋田鉱山専門学校概要　(14)
大阪高等工業学校現況　(15)

活動写真フィルム　(16)

第１巻第２号：1927年２月１日発行（東北大学附属図書館）

広島高工号
本校学生の現業実習に就て　関盛治（１）
直轄高等工業学校長打合会史　西田博太郎（２）
広島高等工業学校概況　川口虎雄（３）
機械科の工場実習の実際　田中重芳（13）
機械科の工場実習に就て　藤野準（16）

第１巻第３号：1927年３月１日発行（東北大学附属図書館）

入学試験号
入学試験成績と出身中等学校在学中の成績　志田正雄（１）
直轄高等工業学校長打合会史（前号第２頁より続く）　西田博太郎（３）
入学試験に関する諸問題　問合事項　（４）
A LIST OF ENGLISH TEXR-BOOKS USED BY THE TECHNICAL COLLEGES　（８）
編集室より　(10)
高工在外研究員（昭和元年）　(15)

第１巻第４号：1927年４月１日発行（東北大学附属図書館）

教科書並就職問題号
就職試験の一例　川井一（１）
就職概況　米沢高工（２）
教科書使用に就て　（３）
英語教科書に就て　（７）
工業専門学校入学志願者数（昭和二年度）　(11)
新嘉坡より布哇まで　鈴木達治（11）
新入生の家庭調査　仙台高工（12）
編集室より　(12)
五月号予告　横浜高工号　(12)
六月号予告　夏期休業利用号　(12)

第１巻第５号：1927年５月１日発行（東北大学附属図書館）

横浜高工号
横浜高等工業学校施設情況　鈴木達治（１）
校内諸会と団体　（３）

入学式に於ける校長訓話　（4）
始業式における校長訓話　（5）
修身科の教授方針　大西友太（6）
教練と校是の協和　田中忠三郎（8）
建築学生の要素　中村順平（9）
機械工学科水力実験室の施設に就て　遠藤政直（10）
職員一覧表　（10）
横浜高工の海外発展　堀江不器雄（11）
学校新聞の経営　吉田昌興（12）
職業指導研究室より　水野常吉（15）
OUR LIBRARY SYSTEM　長尾和肥虎（18）
高工ラヂオリーグ設立の提案　竹内強一郎（18）
技術者の三階級教育主義　（19）
横浜高工附近の名勝と史蹟　（22）
私の教育方針　加藤述之（23）
編集室より　（24）
七月号予告　夏季休業利用号

第１巻第６号：1927年６月１日発行（東北大学附属図書館）

教官会議号
国防と工業　武部欽一（1）
高工教練教官打合会　井沢新（3）
教練教育方案　山梨高等工業学校（7）
専門学校建築科教官協議会　（8）
図書調査　（9）
高工数学科の使命及方法に就て　渡辺義勝（10）
数学教授について　（13）
高工卒業で博士になった者17名　（16）
運動選手と父兄の承諾　（16）
編集室より　（16）

第１巻第７号：1927年７月１日発行（東北大学附属図書館）

夏期休業利用号
夏期休暇利用の実際　（1）
物理学教授について　（6）
物理学科教科書一覧　（7）

雑報　（7）
各教官研究題目調（昭和二年三月）　（8）
ロンドン大学に就て　安川数太郎（10）
学生の喫煙飲酒に就て　（11）
編集室より　（12）
活動写真機械に関する調査（大15. 12. 現在）　（12）

第１巻第８号：1927年９月１日発行（東北大学附属図書館）

高工教育九月号
嗚呼山崎甚五郎先生　山梨高等工業学校（1）
米国に於て活躍せる我高工出身者　（4）
校長柴田才一郎先生を惜む　米沢高等工業学校（5）
メートル法実施に就て　（6）
滞欧雑感　金尾忠義（7）
英国のカレッヂ生活　桑田敬治（9）
技術者の領域と技術者教育　桐淵勘蔵（10）
教育意見の開陳　西田博太郎（11）
昭和二年度入学許可取消調査　（12）
物理実験設備に就て　浜松高工物理科教室（13）
学校教練に就て　吉原工兵中佐（14）
タイムレコーダーに就て　大阪高工（16）
編集室より　（16）

第１巻第９号：1927年10月１日発行（東北大学附属図書館）

高工教育十月号
米国大学に於ける試験制度並特権　歌原定二（1）
入学試験制度改正問題　（3）
教育界各方面の意見　（4）
工業教育振興に関して　瀬尾武次郎（9）
経済的経理に関する実例　（10）
編集室より　（16）

第１巻第10号：1927年11月１日発行（東北大学附属図書館）

高工教育十一月号
官立実業専門学校試験方法要項　（1）
全国高工電気科教官会議概況　福田勝（3）

入学試験学科目調（昭和二年度）（４）
高工電気科の学科目及授業時間数　志田正雄（５）
高工無試験検定の方法（昭和.2.8.調神戸高工）（10）
各校の教授上の連絡に就て　薄井廉介（11）
授業時間改正に就て　神戸高工教務課（12）
機械と電機の製図に就て　清家正（13）
高工卒業生の大学在学生調査（昭和二.九.一現在）（14）
学生の喫煙飲酒に就て（第七号第十二頁より続く）（14）
経済的経理に関する実例（前号第16（ママ）頁より続く）（15）
編集室より（16）

第１号第11号：1927年12月１日発行（東北大学附属図書館）

高工教育十二月号
科学工業博物館　長岡高等工業学校（１）
高工教育第一巻索引　自昭和二年一月至同年十二月　事項別　著者別　学校別　写真別（頁無）
特別研究館に就て　三重高農（３）
文部省諮問事項答申（４）
関西高工生徒監会議概況　広渡純孝（６）
学科課程の改正　桐生高工（８）
工業専門学校試験制度調（文部省実業学務局調査）（９）
ノート教授の改正（10）
神戸高工記念展覧会画報（11）
大岡山物理教室便り　竹内時男（12）
高工教育第一巻会計報告（自昭和二年一月至同年十二月）（12）
編集室より（12）

第２巻第１号：1928年１月１日発行（宇都宮大学附属図書館）

一橋　GOSSIP（１）
工業教育は満足の状態だ　問題は国民の工業知識作興　白上佑吉（談）（２）
実業局の人々（１）（３）
学期末試験廃止と入試科目の半減制　安田禄造（談）（４）
爐辺会議（４）
口頭試験の危機　工卒者の取扱ひ　入学試験の方針に就ひて　明治専門学校（５）
就職前衛戦　三菱王国訪問記（６）
プロフエツサア、パニツク　昇格と失格と　喜びの蔭にこの嘆（７）

対話　孫　山本美郎／出口競（８）
学校教練の総勘定　古荘幹郎（談）（８）
学校の敷地は弱い方が安全　（９）
一人一話　川口虎雄（談）（９）
地方産業との連絡策　斯くして目的を達せん　川口虎雄（談）（10）
大成功に終つた機械学会　広島高工の努力　（12）
民衆化した運動服装　（12）
兵役法改正の研究　吉野栄一郎（13）
時事問題　無試験入学の実施　その論拠は何處にあるか　鈴木達治（談）（14）
帝大と高工　優劣いずれ？　（14）
徳島高工の印象　四国教育界視察土産話　長俊一（談）（15）
時の問題　廣田精一（談）（16）
神戸高工だより　（18）
高工癌物語　白箭子（19）
留学生へ講義が　英国政府から外務省へ　視察調査者も注意　（20）
校長さん消息　（20）
編集室より　（20）

第２巻第２号：1928年２月１日発行（宇都宮大学附属図書館）

話のたね　（１）
風を聴きつつ　川口徳三（談）（２）
工業教育の功労者　鶴巻博士の胸像が出来た　（６）
認識論の修身科教授法　大西友太（６）
教授分配　困る事二つ　某氏談（７）
帝大電気科特権を廃す　高工卒業者の福音　（７）
専門教育と体育運動と保健的指導と其検査と　岩原拓（８）
議会の解散　高工の影響　（10）
一週を五日とせよ　――余裕の説――　出口競（11）
一人一話　出口競（談）（11）
今日の懸案　村上宇一（談）（12）
親しく拝し奉りたる聖上陛下の御事ども　行幸を記念の閲兵式　森彦三（14）
高工『会誌』を不読盲評記　（17）
汽車の旅、草鞋の旅　特別列車の運転　鈴木達治（講話）（18）
仙台の建築科　新設と其内容　議会解散で崇らる　（20）
自校号の発刊　安田禄造（談）（20）
一人一話　秋保督学官（談）（20）

督学官の視察報告　(20)
高工教育物品会計報告　(20)
横浜高工建築委員　(20)
編集室より　(20)

第２巻第３号：1928年３月１日発行（宇都宮大学附属図書館）

話のたね　(1)
修羅史上の絵巻物　神戸高工敷地物語り　安達房右（2）
全国高工の異彩　案外少ない博士号　教授の戸籍調べ　(6)
高工校友会誌いろとりどり　(6)
高工校長職務論　附高工教授覚醒論　(8)
高工訪問記　風をひきに東京工芸へ　(9)
何処へどうしに　在外研究者の首途　お尋ね状に答へられた人々　(10)
生産問題　長俊一（11）
暗雲低迷す　養成所問題　(12)
明治製糖の本拠を訪ふ　就職方針ブチマケ話　(13)
続爐辺会議　(14)
日本語本位論　高工の外国語？　竹内強一郎（14）
貴校の敷地の前身は？　(16)
回答を読んで　(17)
入学試験方針　川口徳三（談）（17）
一人一話　土屋佐平治（談）（18）
文部省が主催して産業教育展覧会　春の上野の呼び物　水口吉蔵（18）
一人一話　西川裕（談）（19）
入学者調節論　就職難緩和策　―（或日の会話より）―　(19)
地方産業提携手段　森彦三（談）（20）
物理学担当教授　打合せ会の開催を提唱　池内本（20）
海外在留教授（七日）　(20)
編集室より　(20)
記事訂正　大西友太（20）

第２巻第４号：1928年４月１日発行（宇都宮大学附属図書館）

話のたね　(1)
新武道主義を提唱す　スポーツの精神的方則　伊東延吉（談）（2）
貧弱な高工の教育　関西視察の所感から　白上佑吉（談）（3）
秋田名物鉱専　スキー隊の活躍　零下十度に流汗淋漓　(4)

歴代校長調べ　（4）
政界へ乗出した横堀治三郎君を語る　久保一郎（5）
（文部大臣水野練太郎講話要約）　（6）
どこの国から高工職員が出る　統計から観た生産調べ　（8）
新聞無用論　（8）
学生の発見した現象　加藤述之（10）
大阪高工より　（14）
歴代校長名及専攻学科目　この質問から獲た答？　（15）
竹内講師の外国語選択科説を読みて　廣田精一（16）
山本式哲学　―金口とパンと―　山本美郎（談）（17）
夏期工場実習にコレ丈けは心得置くべし　土屋佐平治（談）（18）
わしが学校さのお自慢は？　帝国高工を訪ふ　有難づくめのお話　お誕生日のその日　（19）
産業教育展と史料の蒐集　西川裕（20）
編集室より　（20）

第２巻第５号：1928年５月１日発行（東北大学附属図書館）

話のたね　（1）
文部省の産業教育展　下見の日の印象等々　風雨を衝いて上野へ見参す　（2）
帝国教育会総会は五月　（3）
高工建築問題　昇格校と増科校　柴垣鼎太郎（談）（4）
授業料値上げ　四年度に繰延べ　（4）
実業教育と展覧会　秋保安治　（4）
役に立たない高工の卒業生　久保一郎（談）（5）
誌上産業教育展覧会　研究発表競争　各高工の特色発揮　（6）
試験地獄を斯くして救へ　試験問題集を作れ　龍魔爺（8）
全国工業職業校　校長さんのお里調べ　土屋佐平治（談）（9）
広島高工の敷地前身　（9）
画一打破と個性教育　統一すべし画一すべからず　鎌田栄吉（講演）（10）
談片　波多野貞夫（談）（13）
英国に於ける婦人技術者の活動　中島友正（14）
『教授が街頭へ』と化学工業展覧会　長岡高工の名案　（15）
天才と天災　（15）
質に於て量に於て立派に成功した　第一回物理擔任教授打合會　（16）
全国高工から海外発展の人々　卒業回数は？　各校から戴いたお返事　（19）
実業教育　根本改革協議　五月校長会議　（20）
化学会の歴史　世界の各会から　（20）

編集室より　(20)

第２巻第６号：1928年６月１日発行（宇都宮大学附属図書館）

長岡高工号
話のたね　(1)
お雪の待へお花を見に　長岡高工を訪るの記　朝の駅から夕の応接室まで　(2)
街頭へ！　進出した長岡高工　(6)
長岡とはどんなところだろう　工業眼から観察　(6)
斯く信じ斯く行ふ長岡高工の教育方針　福田為造（談）(8)
兄の心持ちで　早船慧雲（談）(11)
発電機の製作　槇田護臣（談）(12)
ローマ字の長岡　(12)
全校を挙げ総動員　佐野砲兵中佐（談）(12)
全校が全競技　宇野茂太（談）(13)
長岡の名所　(13)
製品の人格化　応用化学の教育法　岡部欽二（談）(14)
『筆のあと』と記念帳と参賀名簿　(15)
調査計画　この課の仕事　桐淵勘蔵（談）(16)
大成功裡に化学工業展覧会　長岡高工第一回の催　(16)
長岡市歌　(17)
特色ある長岡高工　その解剖のかずかず　(18)
理科教室より　公式を覚へるな　(20)
機械教室より　実際化の努力　(20)
編集室より　(20)

第２巻第７号：1928年７月１日発行（宇都宮大学附属図書館）

話のたね　(1)
物議を醸した就職問題　或日の緑蔭会議々事　東京大阪両都の会社側連盟す　(2)
給仕さんの研究　各高工の調査　(4)
長岡高工年中行事　(4)
蔵前の開校記念祭を観る　出るも出たり二日間に七万五千人　老紳士を尾行して人めぐ(6)
東京高工の移転　可能か不可能か　いよ々々縺れ出した　(11)
考へられる事ども　浪漫子（談）(12)
私の学校の事ども　安田禄造（談）(13)
高工めぐり歩記　東京高等工商へ　変ったいろいろの特色　(14)
謎の虎の子　バックナンバー　(15)

長岡へごされ　名物名所この通り　冬もよければ夏もよし　渓水生（16）
高工数学教授要目調べ報告　長岡高等工業学校（19）
臨時教員養成機関休止虚伝　(20)
工具を給与す　修了者に対し　(20)
実業局の講習　名古屋高工で　(20)
編集室だより　(20)

第２巻第９号：1928年９月25日発行（宇都宮大学附属図書館）

話のたね　（１）
学期制度に関する調査　二学期と三学期の比較研究　山梨高工調査報告　（２）
質問　貴校に於ける御大典記念事業計画　（７）
葡萄の秋　山梨高工開校式挙行　（７）
西山局長の嘆息　（７）
全国高工電気科教官協議　第二回を神戸高工に開会　神戸高工報告　（８）
就職難解決会議　安川数太郎（11）
直轄校会計員協議会　福井高工で開催す　各校提出の重要な議案　(12)
質問　卒業者就職問題の根本的解決法　(15)
高工数学教授会　安川数太郎（15）
夏の諾威印象記　加藤述之（16）
関校長を礼賛す　会計会議で大人気　(17)
竹橋すずめ　(17)
ところてん　勝田主計（18）
編集室より　(20)

第２巻第10号：1928年10月25日発行（東北大学附属図書館）

山梨高工号
甲府へ　（１）
実業教育の目的と効果　山梨高工開校式の祝辞　中橋徳五郎（２）
山梨高工の思出で　土屋佐平治（２）
山崎校長胸像　除幕式を挙行す　（３）
山梨高工の開校式日　我等の所懐を述ぶ　各主脳者の声明書　（４）
山梨高工はどんな学校？
　電気科の主設備　二方針の適当按配　(8)
　機械科の三設備　学校全体に密接関係　(13)
　土木科の内容　諸般の設備既に成る　(15)
　三科の腕くらべ　開校式日の陳列競ひ　(17)

学友会の活躍　山国で水泳の練磨　(19)
編集室より　(20)

第２巻第11号：1928年11月25日発行（宇都宮大学附属図書館）

校友会改造論　(1)
再びブリ返した蔵前の昇格騒動　(2)
開校式と言ふもの　『甲府へ』その二　(4)
学校工場の管理　重松倉彦　(8)
関西高工競技大会　六校参加して連盟成る　神戸高工報告　(11)
御大典と記念事業　各高工の回答　(11)
物理学の教授法　杉山隆二　(12)
桐生高工だより　(15)
蔵前の喜び　(15)
高工に何を望む　工業学校長から　(16)
蔵前秘話　(18)
高工だより　(19)
編集室より　(20)

第２巻第12号：1928年12月25日（東北大学附属図書館）

話のたね　(1)
今年の総勘定　重要な出来事　(2)
高工へ希望□（判読不能：筆者）る　全国工業学校長回答　(4)
続蔵前秘話　(6)
覚えは全く無い　鈴木大羊　(8)
両高工昇格決定す　(8)
雑録と勤倹　神戸高工小冊子読了感　(9)
生徒主事専任建議　西部高工十校決議　(10)
桐生高工詣で　何を観何を聴く　(15)
生徒の共済会　桐生高工で産声す　(19)
編集室より　(20)

第３巻第１号：1929年１月20日（宇都宮大学附属図書館）

思想問題の善導を望む　勝田主計
思想問題について　山崎達之輔
思想問題に関して　粟屋謙
高工教育第三年初号の発刊に際し　赤間信義

思想善導対策　瀬尾武治郎
思想問題を中心とせる本校の訓練について　大西友太
雑感　吉木一朗
高工教育編集係へ　葛西孝章
思想善導所感　高木秀一
生徒主事任務の一端　河内山幸作
思想教化と我が国体　又井盛治
雑報
　専任学生、生徒主事協議会。高柳助教授。谷口博士。盛岡高等農林学校。大礼式場特別拝観。万国工業会議。水島校長逝かる。噫、関口壮吉氏。編集希望。等々。

第３巻第２号：1929年２月20日（宇都宮大学附属図書館）

柔道教授の方針に就いて　加納治五郎
欧米の高等教育に於ける体育施設　岩原拓
卒業論文に就て　久保進
夏季実習中の調査事項　田中重芳
思想善導に関する一私案　小関三平
小関氏の開示に答ふ　廣田精一
思想教化と我が国体（承前）　又井盛治
入学合格者順位査定法に就て　野村尚
雑報
　体育協議会に於ける文部大臣の訓示。体育協議会記事。体育運動主事会議諮問並答申。工政会の建議。佐野博士教育制度案。専門学校出の教員講習。電磁気は結局重力。女子工業専門学校。ラヂオで軍艦を動かす。五十哩先きを写す写真機。煙を出さぬ機関車。新刊紹介。編集室より。

第３巻第４号：1929年４月25日（宇都宮大学附属図書館）

思想問題について　文部省専門学務局長　西山政猪
吾が校の就職難対策　福井高等工業学校長　関盛治
吾が校の就職難対策　熊本高等工業学校長　三浦鍋太郎
吾が校の就職難対策の一端　米沢高等工業学校
吾が校の就職現況　東京高等商船学校長　鳥谷敏郎
就職難対策に就て　工政会常務理事　倉橋藤治郎
実業教育と海外発展　神田正雄
就職試験の一考察　横浜高等工業学校教授　堀江不器雄
教科書使用に就て　廣島高等工業学校教授　藤野準

全国高工専門教科書調
高工教育に於ける物理学授業時間数に就て　長岡高等工業学校長　福田為造
入学志願者選択の一方法　長岡高等工業学校長　福田為造
入学合格査定に就て　名古屋高等工業学校教授　荒川郁蔵
廣田氏書簡を見て　福田為造
全国高工独逸語毎週授業時数調　神戸高等工業学校
校歌（一）
雑報

又一人出た工学博士神戸高工田辺平学教授。定石破りの卒業式。志願者新記録と新現者。電車罷業と本校生出勤。卒業生在営者慰問。五人目の理学博士。故久邇宮殿下御真筆。猿蟹合戦削除建議。大砲を払下げらる。造船の復活。日本の商船に関する調べ。隆々たる最近の発明界。簡単で完全な防水染色法発明。天然絹糸に優る細糸人絹出現。本年度入学試験に関する調査。地中の水蒸気による電気発生の研究。編集室より。

第３巻第７号：1929年７月30日（宇都宮大学附属図書館）
明専号
巻頭言　一記者（１）
本校の教育方針及施設に就て　明治専門学校長　友田鎮三（２）
高等工業教育に就ての所感　明治専門学校教授　森祐吉（６）
就職難の一対策　明治専門学校教授　栗原鑑司（８）
鉱山工学科の地方的色彩　明治専門学校教授　佐藤與助（９）
我科の独逸語教授　明治専門学校教授　川崎寛（11）
工業教育に就て　明治専門学校教授　中川維則（13）
英語科教室より　明治専門学校教授　池上佐吉（13）
本校教練の現況に就て　明治専門学校配属将校　岡本歩兵中佐（16）
九州に於ける鉱業と我等の責務　明治専門学校教授　岡田丈五郎（17）
本校講堂反響防止施設に就て　明治専門学校長　友田鎮三（20）
選鉱学に就て　明治専門学校教授　小川清（21）
学術雑誌に関する一提案　明治専門学校教授　原田蕃（22）
実習報告文並に卒業論文を通して見た明治専門学校鉱山工学科学生
明治専門学校助教授　小刀一作（23）
当校の入学試験（数学）に就て　明治専門学校教授　高橋啓蔵（24）
リアクション・コンバーター概説　明治専門電気工学教室　加藤惣一郎（26）
還元鉄より鉄及び鋼の製造に関する研究　明治専門学校教授　嘉村平八（27）
数学教授に就て　明治専門学校教授　高橋啓蔵（28）
明専創立当時の思ひ出座談会　植村書記筆記（30）

本校の火の用心と消防　明専庶務主任　植村初巳（31）
魂の教化　明治専門学校教授　室住熊三（32）
私学明専　明治専門学校教授　嘉村平八（33）
寄宿舎　明治専門学校書記　岡田伊佐雄（35）
　雑録
明専を訪ふ　一記者（36）
実業専門学校長会議　（40）
編集言　（40）

第７巻第２号：1933年10月27日（宇都宮大学附属図書館）

浜松高工特集号

本校の紹介と其の使命並に教育方針　校長　長俊一（１）
本校に於ける訓育　生徒主事　大島重太郎（８）
機械学科　機械学科事務取扱　教授　坪井道三（８）
内燃機関研究会　教授　菅野玄之助（６）
電気学科略説　電気学科事務取扱　教授　村田義人（21）
学生の個性調査法に就いて　教授　中島友正（24）
高柳式電視研究と私　教授　中島友正（26）
電視研究と将来　教授　高柳健次郎（29）
応用化学科教室より　応用化学科事務取扱　教授　森岡勇（32）
修身科に就いて　講師　堀江耕造（33）
配属将校の見たる浜松高工　配属将校　歩兵中佐　堅田玄隆（33）
体操科に就いて　講師　堀江耕造（34）
英語・独語の教授方針　講師　堀江耕造（35）
数学科に就いて　教授　大島重太郎（36）
本校に於ける物理学の教授に就いて　教授　大竹玄吾（36）
図書取扱並に閲覧の状況　図書課勤務　松井矩（38）
校友会の組織と其特色　常務部長　堀江耕造（39）
消費組合に就いて　理事長　堀江耕造（41）

Summary

Higher Technical School Education Specialized Magazine “Higher Technical Education” Table of Contents (Draft) and Explanation

Toru Uchida, Tsuyoshi Maruyama

Abstract: This material is a table of contents and explanation of the specialized magazine “Higher Technical School Education”. The higher technical school, whose main purpose is to train technicians, was significantly expanded in the Taisho era, and a total of 20 schools were established. With this expansion as an opportunity, “Higher Technical School Education” was published for mutual cooperation between higher technical schools and the renewal of technical education at the higher education stage. Although it has been published continuously for more than 7 years, its existence was hardly known until now. This magazine tells us the reality of higher technical school education.

Keywords higher technical school, educational magazine, “Higher Technical Education”

(2020年10月８日受領)